

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



梅

雨近くなり、田に水が張られる頃になるとカエルの産卵期となり、いろいろなカエルの鳴き声で賑やかになります。アマガエル、ツチガエル、トノサマガエルなど一匹が鳴きだすと、それにつられて次々と連呼し、カエルの大合唱が始まります。その中で際立って大きい声で、また特異な声で鳴くカエルがいます。ウシガエルです。食用ガエルと言ったほうが分かり易いかもしれません。

両生綱無尾目アカガエル科アカガエル属ウシガエル、本県ではウシワクド、シヨッキン(鹿央町)シヨクヨウビキ(城南町)、ワクドガマ(田浦町)などといえます。日本、中国、台湾、アメリカ、ヨーロッパ、キューバ、メキシコ、タイ、マレーシア、カナダなど分布しています。食用として養殖された個体が逃げ出し日本は勿論世界中に広がったようです。

ウシガエルは日本には食用として研究のため東大教授であった動物学者が1918年アメリカのニューオリンズから14匹を導入したのが最初で、その後輸出用として大量に養殖生産されたことがあります。その時アメリカザリガニは養殖用の餌として輸入されました。ウシガエルは別名食用ガエルともいいますが、これは当時食用として利用されるように政府直々命名したもので、栄

えあるスタートとなったのですが、食糧難の頃は別として食用としてはあまり普及しませんでした。

鳴き声の音質はバスで非常に大きい声で「モーウモーウ」「ブオーブオー」と牛に似た声を出すことからウシガエルの名の由来となったのでしよう。ひと頃は川には勿論、田圃や溜池、クリーク、防火用池などいたる所で繁殖し、家の周辺でも夜うるさく鳴き響くので、安眠妨害ともいわれたこともありましたが、現在ではそれほど多くは探すのに苦労するほど少なくなりました。私は子どもの頃エビ釣りに行った時苦い経験があります。菊池川右岸の江栗の川岸の藪を押し分けて川面に辿り着き、突き出した岩の上から釣り糸を垂らし、手長エビを10匹ほど釣ってテグスに刺し通して、川の反対側にあつた小さな堀に浸けていたら、そのままがっぶりウシガエルにひと呑みされてしまったことがあります。やっと釣り上げた貴重なエビの惜しかったことは今でも忘れません。

カエル類は一般に動く物には跳びついていくので、ウシガエルも、大きな釣り針に赤布の切れ端を結び付けて上下に動かして釣ったものです。ウシガエルは肉食で、アメリカザリガニ、ドジョウ、オタマジャクシ、カエル、ミミズなど食べます。



6〜7月頃水田や川のゆるやかな流れの所や池に1万個ほどの卵の入った寒天状の卵塊を産みます。生れたオタマジャクシは翌年の夏成体になります。本県では御船町、松橋町、鏡町などに多いといわれていますが、現在は以前ほど多くは産みません。もともと食用として輸入したウシガエルですが両生類や爬虫類は料理するのは遠慮する人が多く、家庭の食卓に上がる機会が少ないと思います。実は白身で肉と魚の仲間のような味で、唐揚げや油炒めなどにするとあっさりした品の良い味になります。中国では「田鶏」と言われてトノサマガエルを使うことが多いようです。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡

11

大田 幸博

(元・菊池川流域同盟 和水町水援隊長)

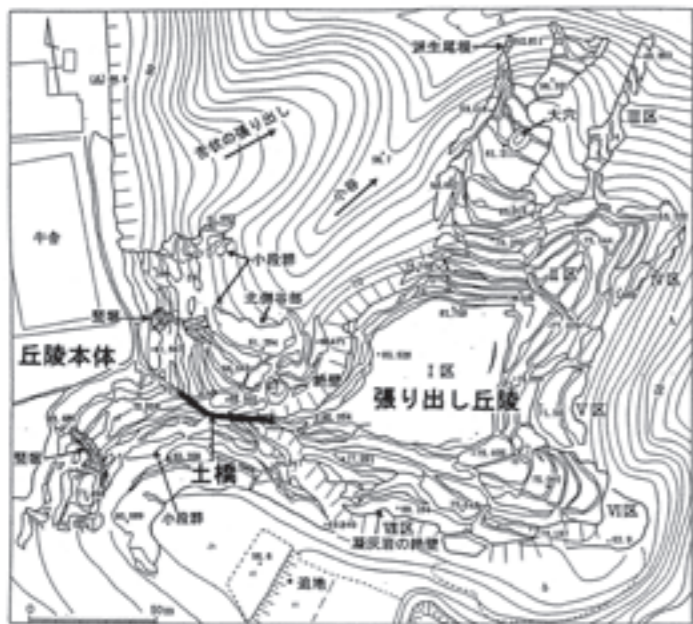
中 世城の橋は、木橋を架ける代わりに、土橋にする選択肢もありました。平城では、堀を巡らす中で、出入り通路のために、細い

土手(土橋)を残しました。

平山城や山城では、堀切の中央部を浅く掘り残して、普段の通路(土橋)としました。土橋からは、梯子を架けて、急な法面を登ることもありました。《有事の際は、土橋に柵を設けて、梯子を外す対策が計られました》。一方で、堀切に跳ね橋を架ける事もありました。木橋の一種で、有事の際に、橋面をそっくり城内に引き込むスライド式の造りでした。

志口永城跡(平山城)の通路は、典型的な土橋です。本体部分の丘陵地と、張り出し丘陵(城跡地)の間には、南北を谷に挟まれた鞍部があります。ここで、带状のくびれ地形を、さらに削り落して、切り立った狭い通路に仕立てたのです。これまでも説明しましたが、道幅1m弱、全長40m、南壁の高さ2.9m、県内でも、最大級の本格的な土橋として注目されます。

土橋の利点は、何といつても、敵勢が容易に破壊できない事です。戦いのさなかですから、そう簡単に土木工事は、行えません。これが、木橋の場合には、状況次第で、短時間で落されてしまいます。火をつけ



志口永城跡測量図



小乙城跡測量図

れたら最後です。橋が落とされると、即、城の封鎖に繋がります。物資などの補給が断たれることを意味します。それは、落城につながります。土橋では、入口の周囲の守りをしっかり固めておけば、この心配がないのです。しかし、不利なこともあります。戦局によっては、橋を落とした方がよい場合でも、それが出来ません。戦法が固定化する懸念があつたのです。

おことわり：「志口永城跡⑧」で、手違いにより、左図「小乙城跡」の測量図面が、「志口永城跡」の測量図面になっていました。今月号で訂正させていただきます。両城跡の縄張りとは、とても似かよっていますので、比較してご覧下さい。

〔備考〕一般的な江戸時代の「土橋」は、木橋の一種で、丸太を並べて橋面を造り、土をかけて固めました。そうすることで、凸凹の丸太に土が詰まって、平らになります。このような橋をいいます。中世城でいう「土橋」とは違いますので、ご注意下さい。